

## ■ 追悼 ■

## 喜多村勇先生を偲んで

脇 口 宏

高知大学前学長  
高知地域医療支援センター長

令和3年12月13日、恩師 喜多村勇先生が永眠されました。享年94歳でした。

喜多村先生は昭和28年3月に岡山大学医学部を卒業され、インターン終了後、当時の浜本英次教授門下生として小児科学の研鑽を開始されました。若いころから『花のニッパチ組』と称され、岡山大学の将来を背負って立つ研究者の1人と目されていたと先輩から伺いました。先生は、高知医科大学設立に伴い、昭和53年4月に初代小児科教授として高知に来られました。初代学長の平木潔先生の懐刀として呼び寄せられ、高知医科大学創設、医学部附属病院開設に尽力されました。同61年に副学長（教育担当）、平成2年に副学長・附属病院長、同4年から高知医科大学第4代学長を2期6年間務められ、平成10年3月に任期満了退職されております。その間に、文部省高等教育局医学視学委員、厚生省医療審議会委員、医学教育振興財団評議員の重職を歴任されました。学会活動では、日本感染症学会と日本ウイルス学会の創設期から評議員として我が国の感染症研究の発展に尽力され、小児科教授になられてからは、日本小児保健協会評議員・理事、日本小児科学会評議員・理事、などの要職を歴任されました。学術集会の開催については昭和47年に臨床ウイルス談話会（現；日本臨床ウイルス学会）を岡山で開催され、高知に来られてから第12回日本小児ウイルス病研究会（現；日本小児感染症学会）、第57回日本組織培養学会、第21回小児呼吸器疾患学会の会長を務められました。

高知医科大学医学部附属病院は昭和56年10月に開院しましたが、喜多村先生は臨床系教授のリーダーとして国立大学初の電子カルテの整備に尽力されました。高知大学の診療情報は開院以来、現在に至るまで全てのデータを同じシステムで継続的に保管され、開院以来の膨大な臨床データを活用して『データマイニング』による『糖尿病の臨床経過の予測』など多くの成果が出されております。

喜多村先生は臨床ウイルス学の研究者として多数の研究業績を残しておられますが、私が第一に挙げたいのは『感染症サーベイランス』事業です。現在、感染症サーベイランスは感染症を制御するうえで欠かせない重要事業であることは周知のことですが、喜多村先生は昭和49年7月、『中国四国兵庫地区臨床ウイルス懇話会』を立ち上げられ、中国四国地方と兵庫県内に定点を設定し、「中国四国兵庫地区感染症サーベイランス」事業をスタートさせました。我が国で初めての感染症サーベイランスで、これを先導役として、国家レベルの『感染症サーベイランス』事業が始まったのです。定点の先生方から毎月報告をいただき、研究会を年2回ほど岡山で開催し、中国四国兵庫各地の感染症の状況や研究報告を多くの先生方にしていただきました。参加者全員が新しいことを成し遂げるといふ熱気に満ち溢れた会でした。私も事務局を担当させていただいた時期があり、研究室の先輩たちと、「サーベイランスは何のためにやっているのだろう」とか、「将来、白血病の発症機序に関わるヒントを得るためじゃないか」などと話し合ったものでした。

第二に挙げるべきはJTC3(H細胞)の樹立でしょう。これは、昭和30年代中頃に我が国で3番目に樹立された組織培養細胞株です。JTC1とJTC2は東京大学の浦田教授という方が樹立されましたが、「岡山のような田舎大学の若い研究者が日本で3番目の組織培養株を樹立した」と、当時はとても注目されていたと伺いました。当時の教授、浜本先生を称えて医局では『H細胞』と呼んでおりました。この細胞は、ヒト胎児組織から樹立された細胞株で、麻疹ウイルス、エンテロウイルスなど多種類のウイルスに感受性があり、岡山大学小児科学教室における臨床ウイルス学の研究になくてはならない細胞でした。残念なことにJTC3は喜多村先生が高知に赴任される前後に継代出来なくなりました。私が、組織培養やウイルス分離を担当していた時期であり、悔やんでも悔やみきれない出来事です。



第50回 日本臨床ウイルス学会懇親会にて  
(平成21年6月)

昭和53年11月、突然、喜多村先生から「わきさん高知に來い」と命じられ、当時の木本浩教授からは「2～3年頑張ったら、岡山に帰してやるけん高知に行つて來い」と言われ、翌年4月に高知に赴任しました。そのまま40年以上にわたり高知で教育・研究・診療に携わることになりましたが、当時、高知医科大学の建物は2階建ての講義棟に学長室と教養の先生方の研究室があり、私が過ごすべき基礎・臨床研究棟は建物が完成したばかりでした。小児科の医局には、電話が1台あるだけで、実験器具や試薬は何一つなく、何をすればいいのか途方にくれたものです。おまけに、前任していた倉繁隆信助教授(後の教授、故人)は1週間後に米国に留学し、間もなくして頼みの喜多村先生は乗っていたタクシーの交通事故で大けがをされ、半年間ほどの入院生活を送られました。誰もいない医局に出勤し、図書室で最新論文を読むのが私の日課となり、砂を噛むような思いをしたこともありました。しかし、この時の1年間ほど多数の論文を読破したことはなく、その後の研究者としての道を拓いてくれた1年であったと感謝しております。

「喜多村先生と言えばお酒」というのが私と同世代以上の先生方に共通の喜多村先生像ではないでしょうか。この追悼文でも、お酒を飲んでおられる写真を使いたいと考え、平成21年6月に私が『第50回日本臨床ウイルス学会』の会長を務めた時の懇親会で、お酒を飲みながら歓談されていた時の写真を切り取って使用させていただきました。左手に持たれているガラスのぐい呑みが判別できるでしょうか。

喜多村先生は酒が入ると必ず弟子を相手に研究論議を始められたものでした。私が6研(喜多村研究室)に入って間もないころ、東京の学会に出席して新幹線で岡山に帰る途中のことでした。例によって酒盛りが始まったのですが、酒が入るとすぐに研究論議が始まりました。「これが面白い」、「あれが面白い」と様々な研究テーマをあげながら、「○○、お前がやってみるか」「△△、お前はどうか」と弟子に振ってくるのですが、そのうちに、一番下っ端の私に「わきさん、お前はどうか」となりました。この時、かなり酒が入り、思考力も低下して少々眠くなっていた私は「親

分(6研では喜多村先生を『親分』と呼んでいました), 酔った時くらい研究の話は止めましょうよ」と言ってしまったのです。普通なら「何を言うか、この馬鹿たれが」と叱られたことでしょうか、喜多村先生は私を諭すようにおっしゃいました。「わきよ、酒が入った時こそ一番自由に豊かなアイデアが浮かんでくるんじゃ。国際学会の懇親会に行ってみい。優れた研究者ほど真剣に研究論議を進めておるぞ。」と滾々と諭してくださったのです。私も何時の頃からか、酒席で若い者を相手に繰り返し研究の話をして迷惑がられていたように思います。

喜多村先生が「これをしたら面白いんじゃが」と提案されたことの多くは、私たちには漠然とし過ぎており、その重要性を理解できないで「また、親分が訳の分からんことを言いだした」と笑っていたものです。ところが、数年後にその『訳の分からんこと』が外国から素晴らしい論文になって報告されることが何度もありました。まさに、『後の祭り』です。親分が「わしの弟子ほどわしの言うことを聞かんで、わしの研究を知らん者はおらんじゃろうな」と嘆かれていたことも悔やみきれないことであります。「近すぎると、山の高さが見えない」とは、まさに私たちのためにある言葉であります。

酒席の話題で特筆すべきものに『ポリオ事件』があります。日本でポリオが大流行していた頃の話です。山手線の網棚に予研(国立予防衛生研究所, 現; 国立感染症研究所)から分与されたアデノウイルス(と記憶していますが、西林洋平先生によればポリオウイルスだったということです)を入れたポットを電車の網棚に置き忘れて東京駅で下車されたそうです。気が付いたときには、乗っていた電車は既に発車しており、進退窮まった喜多村先生が駅員に伝えたことは「予研でもらった『ポリオウイルス』を入れたポットを車内に忘れた」ということでした。「東京駅の指令室が真っ青な顔をして、山手線内回りの全車両をストップさせて捜してくれたんじゃ。あれが、浜本先生にばれていたら、即破門じゃったろうな」といたずらっ子のように笑いながら何度も話されたことは、笑い話には出来ない『大事件』でした。因みに、電車を止めた賠償金は請求されなかったそうです。

喜多村先生は歌もお好きでした。6研の飲み会で、必ず歌われたのが春日八郎の『別れの一本杉』でした。かの大作曲家・船村徹の代表作の一つです。喜多村先生は「泣けた泣けた、こらえきれずに泣けたっけ、・・・」と、緩やかなテンポで野太く渋い声で切々と語りかけるように歌われたものです。ある時、私に向かって「わきさん、尺八が上手いんじゃから歌も歌えるじゃろう。何か歌え」と命じられました。親分の命令では断る訳にもいかず、これも船村徹作曲で大下八郎の『女の宿』を歌いました。喜多村先生は「ええ歌じゃな、もう一曲行け」と言われたのです。レパトリーが少ない私は厚かましくも『別れの一本杉』を歌ってしまいました。喜多村先生はいたく気に入られて、『別れの一本杉』はわきに譲る。わしはもう歌わん」と言われたのですが、先輩には「わきの歌には味がない。やっぱり親分の『別れの一本杉』がええ」と酷評されました。

歌と言えばもう一つあります。ある時、喜多村先生が「韓国に行って『トラジ』を歌おう」と言い出されたのです。6研の先輩にも声をかけたところ、岡山で開業されている平井俊太郎先生と津山の林洋光先生がのってくださり、数人で韓国旅行に出かけました。そこで、韓国料理と酒を楽しみ、カラオケ店で念願の『トラジ』を何度も嬉しそうに歌われた親分の姿をつい昨日のように思い出します。

最後に、喜多村先生の研究哲学を紹介させていただきます。私が6研に入ったころは、電子顕微鏡によるウイルスや細胞の解像が持て囃されておりました。ある先輩が「自分もウイルスの電顕解析をやってみたい」と思い、「親分はどうして電顕をやらないのですか」と質問されたそうです。答えは「お前らに機械でデータを出すような研究はさせとうないんじゃ。わしは、技術者は育てん、研究者

を育てたいんじゃ。」とのことでした。私が直接指導されたことは、「実験を技術員にやらせっぱなしにはいかんぞ。自分で実験して、研究ノートを克明に記録するんじゃ。そしたら、その時には気づかんかったり失敗と思うとったことの中にも、素晴らしい発見をすることが出来るんじゃ。考えながら実験することが大事じゃ」ということです。私の汗と涙が染み込んだ研究ノートは、圧倒的に失敗データが多いものでした。喜多村先生は「早う実験をせえ」と口癖のように言われましたが、何回ネガティブデータを出しても、「早う結果を出せ」とは言われませんでした。そのお陰で私は研究を嫌いになることなく研究者そして教育者としての道を全うすることが出来ました。

まだまだ、平山先生や沖縄の乳幼児健診のこと、厚生省の会議で官僚の意に反する正論を吐露して罷免になったことなど書き尽くせませんが、筆を置かせていただきます。

喜多村先生には感謝しても感謝しても感謝しきれず、何度お礼を言っても言い足りません。親分、私を6研に受け入れていただき有難うございます。私を高知に連れてきていただき有難うございます。「わきさん、頑張れよ」と慈父のごとく励ましていただき有難うございます。もう、「親分、岡山に電話せんといけませんのでそろそろ帰りましょう」とお酒を止める者は誰もおりません。心ゆくまで大好きなお酒をお楽しみください。衷心よりご冥福をお祈りしております。

\* \* \*